

# 山口県における地域の健幸（ウェルネス）の測定

－徳山大学研究ブランディング事業の成果の評価に向けて－

Survey on Wellness of local residents in Yamaguchi Prefecture

－Toward an evaluation of the outcome of the Tokuyama University

Branding Project－

井出野尚・岡野啓介・高田 隆

キーワード：健幸（ウェルネス）、幸福度、生涯スポーツ、介護予防、福祉と ICT 活用

## I. はじめに

文部科学省が平成 28（2016）年度に創始した「私立大学研究ブランディング事業」は、学長のリーダーシップのもと、大学の特色ある研究を基軸として全学的な独自色を打ち出す取り組みを行う大学を支援する事業である。研究内容はもとよりそれを支援する全学的体制の構築や大学全体のブランド向上につなげる広報戦略などをも重要視する「教職員が一体となった」組織改革を促す事業として創設された。徳山大学は、平成 29（2017）年度事業に申請した『**健幸（ウェルネス）都市しゅうなん**』構築に向けた研究・活動拠点の創設が採択された。

徳山大学研究ブランディング事業（以下、「TU\_UBP」と略記）では「健幸（ウェルネス）都市」を、幼少期から高齢期まで全ての地域住民が生涯スポーツ（健康の増進や保持・レクリエーションを目的に、あらゆる世代の人々が気軽に参加することのできるスポーツ）の実践によって健康で豊かな生活をめざし、一方で、介護を必要とする住民には充実した介護支援が提供され、住民一人ひとりによる助け合い活動が根付いた安心安全のまちを指すものと定義した。そして、そのような「健幸都市しゅうなん」の実現に向けた研究拠点を徳山大学のなかに構築することを、事業の目的とした。

この目的を本学の教育研究資源に照らし、図 1 に示す 4 つの研究部門：

- [1] 「健康と生涯スポーツ」
- [2] 「介護予防と生涯スポーツ」
- [3] 「介護支援の充実と福祉情報」
- [4] 「社会的・経済的効果把握」

を設定した。



図1 TU\_UBPの概要と4研究部門

最初の2つの部門は、本学のスポーツ科学系及び教員養成系の教育研究資源を背景に[1]「健康」と[2]「介護予防」の2つを目的とする「生涯スポーツ」の研究をテーマとするものである。域内の教育機関や本学エクステンションセンターと協働し、幼児・小中学生から中高齢者までの地域住民を対象とするスポーツ活動の実態と運動能力の調査を実施するとともに、体力向上プログラムの開発・提供と、その効果の検証をめざした。

次に3つ目の研究部門[3]「介護支援の充実と福祉情報」では、介護を必要とする地域住民に対し、本学の福祉情報系の研究資源を背景に、[3-1]福祉コ

コミュニティ（地域福祉ネットワーク）形成、及び、[3-2] ICT 活用、を基盤とした福祉サービスの充実と高質化をめざした。

これら〔1〕～〔3〕の事業に対し、その成果の評価をめざすのが〔4〕「社会的・経済的効果把握」研究部門である。この部門では、〔4-1〕地域生活の「健幸（ウェルネス）度」に対する住民評価を測定し、その結果と「幸福度」「健康度」との相関を分析する研究（心理学系）、及び、〔4-2〕健康・スポーツ関連産業の振興がもたらす地域経済への波及効果の研究（経済・ビジネス系）、という2つの分野の研究を通して、TU\_UBPの事業成果を評価する体系の確立をめざした。

本研究は、上述の諸事業のうち、〔4-1〕の遂行をその目的とする。TU\_UBPは、地域の「幸福度」と「健康度」の増進に寄与する事業と位置づけられる。その事業成果を評価するためには、地域の幸福度と健康度を測定し、TU\_UBPの4つの事業成果との関連を検討する必要がある。そこで本論では、まず幸福度の測定に関する研究を総括し、調査で用いる測定項目を定めた（第Ⅱ章）。また、健幸（ウェルネス）度については、TU\_UBPが提示する「健幸（ウェルネス）」の定義に基づき、地域生活におけるその現状に関する住民評価を求める質問紙を考案した（第Ⅲ章）。それらを統合した質問紙を用い、山口県内の5地域を対象とするWeb調査を実施した（第Ⅳ章）。そこで得られたデータの分析を通して、作成した質問紙の検証を行うと共に、地域住民の幸福度・健康度とTU\_UBPがめざす健幸（ウェルネス）度の相関を論じ、事業の進捗状況の評価を試みた。その結果について報告する（第Ⅴ章）。

## Ⅱ. 幸福度の測定

幸福は、個人にとっても社会にとっても重要な価値として位置づけられ、これまで多くの検討が試みられてきた。心理学における幸福の検討は、この半世紀の間に大きく進展した。1960年代には、生涯発達の文脈のもとで、人生満足度（life satisfaction）尺度（Neugarten, Havighurst & Tobin, 1961）の開発がなされている。その後、社会心理学においても Diener らのグループを中心に、

主観的幸福感とさまざまな要因との関連の検討が進み、今日では比較文化研究が大きく進展している。1990年代に入ってから、ポジティブ心理学 (Positive Psychology) のスタートに相まって、臨床心理学においても幸福研究は大きな注目を集めるようになってきた。それまでの心理学はどちらかといえばネガティブな側面にスポットを当てた研究が多く、ポジティブな側面の検討が重要であることが主張された。幸福の規定因の検討に始まり、その後幸福に生きるためにはという問題提起のもと多くの研究がなされてきた (Duckworth, Steen & Seligman, 2005)。このように幸福研究は、発達・社会・臨床・比較文化など領域横断的であり、用いられる定義と測定に用いられる尺度は異なっている。

現在、あなた自身はどの程度幸せですか。「とても幸せ」を10点、「とても不幸せ」を0点とすると、何点くらいになると思いますか。いずれかの数字を1つだけ○で囲んでください (○は1つ)

と も 不 幸											と も 幸 せ
0点	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10点	

図2 幸福度11件法 (「第1回生活の質に関する調査結果」  
(内閣府経済社会総合研究所幸福度研究ユニット, 2012) より)

また、幸福の研究が大きな注目を浴びた理由の一つは、社会の状態の記述に幸福度が用いられ始めた点である。今日では、政策決定支援場面での幸福感の測定ガイドライン (Diener, 2006) などが提示されており、世界40か国以上で調査がなされている (Diener, Oishi & Lucas, 2015)。本邦においても平成22 (2010) 年に内閣府経済社会総合研究所「幸福度に関する研究会」が発足し、平成24 (2012) 年には「第1回生活の質調査」を行っている。「第1回生活の質調査」で用いられた幸福度の調査項目を図2に挙げた。幸福度を社会調査で用いる傾向は、社会の望ましさの指標として、GDPなどの経済指標だけでは不十分であるとの指摘が背景にあり、ブータンのGNH指標 (国民総幸福度: Gross National Happiness) の提案などが特に著名である。主観的幸福度をを用いた経

経済学では、効用の代理変数として主観的幸福度を用いることも多い(筒井, 2012)。経済学系の雑誌における主観的幸福度の規定因に関するレビュー (Dolan, Peasgood & White, 2008) では、所得や社会的発達の程度、個人特性などの指標と幸福度との関連を検討している。また、地域の幸福度の測定に関しても、近年アプローチがなされている。京都大学こころの未来研究センター「地域の幸福と文化プロジェクト」は、地域の豊かさを包括的に測定できる指標の開発を行っている (URL: <https://culture-wellbeing.kokoro.kyoto-u.ac.jp/>を参照)。彼らは、図 2 に示した幸福度や、町内の人々の幸福度などを用い地域の幸福を多面的に測定し、開放性や信頼性といった心的変数や生活環境変数との関連を検討している (内田, 2016)。

本調査における幸福度の測定項目としては、「第 1 回生活の質に関する調査結果」(内閣府経済社会総合研究所幸福度研究ユニット, 2012) を参考に、Q1「現在の幸福度」、Q2「あなたの街の人々の幸福度」、Q3「将来の幸福度」の 3 項目を使用した。Q4「健康状態」に関する項目としては、Q4.1「現在の健康度」、Q4.2「街に住む人々の健康度」の 2 項目とした。調査に用いた全質問項目を資料 1 に示した。

### Ⅲ. 健幸（ウェルネス）度の測定

第 I 章に示したように、徳山大学研究ブランディング事業 (TU\_UBP) の目的は、地域の健幸 (ウェルネス) 向上である。その具体的な内容は、「生涯スポーツ」研究を通じた [1] こども達のスポーツ参加と健康の増進 (以降、**こども達のスポーツ**)、[2] 中高齢者のスポーツ参加と健康の増進 (以降、**中高齢者のスポーツ**)、及び、「福祉情報」研究を通じた [3-1] 福祉コミュニティ形成による生活支援・介護サービスの充実 (以降、**福祉コミュニティ形成**)、[3-2] 情報技術活用による生活支援・介護サービスの高質化 (以降、**福祉への ICT 活用**) の 4 点にある。以下ではこれらを TU\_UBP における**健幸 (ウェルネス) の 4 要因**と呼ぶ。本研究ではまず、その現状 (すなわち事業の進捗状況) に関する地域住民の評価を問う質問紙を作成した。具体的には、**健幸 (ウェルネス) の**

4 要因それぞれに関する「㊦あなたの街の現状に対する評価」を、[イベント数・現状][環境・施設][教育・指導体制][参加(受益)者数][現状への満足度]の 5 つの観点から問う 20 問、Q5.1～Q5.20 を作成し、更に、その現状に対する「㊧徳山大学の貢献度評価」を問う質問項目 20 問、Q6.1～Q6.20 を加え、全 40 問とした。健幸(ウェルネス)度を測定する尺度(質問紙)の構造を図 3 に示した。

			TU_UBP における健幸(ウェルネス)の 4 要因			
			[1]	[2]	[3-1]	[3-2]
			こども達のスポーツ	中高齢者のスポーツ	福祉コミュニティ形成	福祉への ICT 活用
㊦	あなたの街の現状に対する評価	イベント数・現状	Q5.1	Q5.6	Q5.11	Q5.16
		環境・施設	.	.	.	.
		教育・指導体制	.	.	.	.
		参加(受益)者数	.	.	.	.
		現状への満足度	Q5.5	Q5.10	Q5.15	Q5.20
㊧	徳山大学の貢献度に対する評価	イベント数・現状	Q6.1	Q6.6	Q6.11	Q6.16
		環境・施設	.	.	.	.
		教育・指導体制	.	.	.	.
		参加(受益)者数	.	.	.	.
		現状への満足度	Q6.5	Q6.10	Q6.15	Q6.20

図 3 健幸(ウェルネス)度を測定する尺度(質問紙)の構造

#### IV. 調査

大問 Q1～Q6 で構成される質問紙(資料 1)に、回答者の「性別・年齢・家庭状況・居住地域・職業・最終学歴」を問う質問条項を加え、平成 31(2019)年に Web 調査を実施した。調査に参加した人数、期間、及び対象とした地域は以下の通りである：

- 調査参加者 2060 人(女性 1124 人、男性 936 人)
- 調査期間 2019 年 02 月 15 日～2019 年 02 月 18 日
- 調査地域 山口県内 5 地域(周南市/下松市/光市、岩国市/柳井市、山口市/防府市、宇部市/山陽小野田市/美祢市、下関市)。各地域から各々 412 名(×5=2060 名)が回答。回答者の年齢構成を表 1 に示した。

表1 回答者の年齢構成

年齢	20歳代		30歳代		40歳代		50歳代		60歳代	
	20～24	25～29	30～34	35～39	40～44	45～49	50～54	55～59	60～64	65～69
人数	70	184	246	212	287	288	266	238	128	141
	254		458		575		504		269	
合計	2060									

## V. 結果・考察

### 1. 幸福と健康（Q1～Q4）

図4にQ1（現在、あなた自身はどの程度幸せですか：現在の幸福度）の回答の分布を示した。「とても不幸せ」を0点から「とても幸せ」10点の間の回答率を示している。5点と7点にピークが認められた。また、表2にQ1「現在、あなた自身はどの程度幸せですか」（現在の幸福度）、Q2「あなたからみて、あなたの街に住む人々は全般的にどのくらい『幸せ』を感じていると思いますか」（街の人々の幸福度）、Q3「あなたは今から5年後、現在に比べてどの程度幸せを感じていると思われますか」（将来の幸福度）の平均値を示した。山口県内5地域と周南広域都市圏（周南市/下松市/光市）との間に、大きな差は認められなかった。本調査のQ1（現在の幸福度）と同じ質問項目を用いた「第1回生活の質に関する調査結果」（内閣府経済社会総合研究所幸福度研究ユニット, 2012）においても、5点と7点にピークがみられ、平均6.1（SD2.2）であり、本調査と同様の傾向であった。

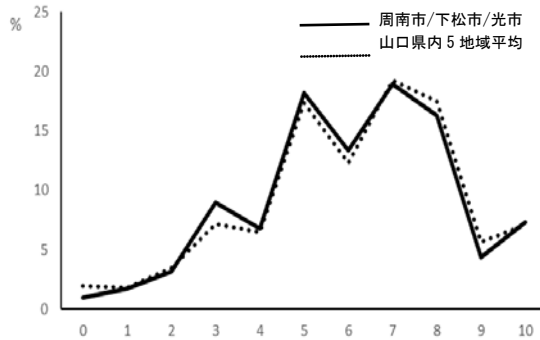


図4 「現在の幸福度」項目の回答の分布

表2 Q1～Q3の幸福度の平均（標準偏差）

	現在の幸福度	街の人々の幸福度	将来の幸福度
周南市/下松市/光市	6.1(2.2)	5.8(2.4)	0.4(2.2)
山口県内5地域平均	6.1(2.3)	5.8(2.6)	0.5(2.1)

表3に現在の健康度と街の人々の健康度の平均値を示した。山口県内5地域と周南広域都市圏（周南市/下松市/光市）との間に、大きな差は認められなかった。

表3 Q4.1、Q4.2の健康度の平均（標準偏差）

	現在の健康度	街の人々の健康度
周南市/下松市/光市	3.5(1.1)	3.5(0.7)
山口県内5地域平均	3.5(1.1)	3.5(1.1)

幸福度と健康度との関連を検討するために、幸福度と健康度の相関分析を行い、結果を表4に示した。現在の幸福度は、街の人々の幸福度（0.51）、将来の幸福度（0.37）、現在の健康度（0.36）との間に0.3以上の相関がみられた。また、街の人々の幸福度と街の人々の健康度の間は0.34、現在の健康度と街の人々の健康度の相関係数は0.43であった。



表4 幸福と健康の相関分析結果

	現在の幸福度	街の人々の幸福度	将来の幸福度	現在の健康度	街の人々の健康度
現在の幸福度	1.00				
街の人々の幸福度	<b>0.51</b>	1.00			
将来の幸福度	<b>0.37</b>	0.24	1.00		
現在の健康度	<b>0.36</b>	0.22	0.20	1.00	
街の人々の健康度	0.18	<b>0.34</b>	0.17	<b>0.43</b>	1.00

## 2. 健幸（ウェルネス）の4要因の現状（Q5）と幸福・健康

第三章で、地域での生活における **健幸（ウェルネス）の4要因** に関する質問項目 **Q5（Q5.1～Q5.20）** を提示した。Q5 を対象に因子分析を行い、本調査で仮定した4要因との対応関係を検討した。因子抽出法には最尤法を用い、プロマックス解をもとめた。4因子構造が認められ、4つの因子は、質問項目作成時に仮定した TU\_UBP における **健幸（ウェルネス）の4要因（こども達のスポーツ・中高齢者のスポーツ・福祉コミュニティ形成・福祉へのICT活用）** に対応していた。この結果から、**Q5** は、本学ブランディング事業 TU\_UBP の進捗度の尺度として、一定の妥当性を持つものと考えられる。また、資料2に示した  $\alpha$  係数は、いずれも 0.8 以上の値であり、各要因の尺度として用いた質問項目には一貫性があることが示された。

表5に上記4因子ごとの評定値平均を示した。中間回答（どちらともいえない）が3点であることから、**健幸（ウェルネス）の4要因** の現状に対する住民評価は余り高くないこと、すなわち、現時点では、TU\_UBP の目標が達成されているとは言えない状況が示された。山口県内5地域と周南広域都市圏（周南市/下松市/光市）との間に、大きな差は認められなかった。

表5 健幸（ウェルネス）の4要因の評定値平均（標準偏差）

	こども達のスポーツ	中高齢者のスポーツ	福祉コミュニティ形成	福祉へのICT活用
周南市/下松市/光市	3.1 (0.7)	2.9 (0.6)	2.9 (0.7)	2.6 (0.7)
山口県内5地域平均	3.0 (0.8)	2.8 (0.7)	2.9 (0.7)	2.5 (0.7)

### 3. 幸福度を被説明変数、健幸（ウェルネス）の4要因を説明変数とする重回帰分析

次に、Q1~3の3つの幸福度（現在の幸福度、地域の幸福度、将来の幸福度）を被説明変数とし、TU\_UBPにおける**健幸（ウェルネス）の4要因**を説明変数に用いた重回帰分析を行った。その結果を表6に示す。これらの3つのモデルのいずれにおいても、修正説明率は低かったものの、**子ども達のスポーツと福祉コミュニティ形成**が、一貫して有意な標準化回帰係数を示していた。地域住民の幸福度に対してこれら2要因が影響を与えていることが示された。

一方、他の2要因（**中高齢者のスポーツと福祉へのICT活用**）はいずれのモデルにおいても有意な標準化回帰係数を示していなかった。両要因の幸福度に対する影響があまり無いという現状を示している。**中高齢者のスポーツ**に関して、回答者の年齢層を中高齢者層（「50歳以上」や「60~65歳」等）に限定するフィルターをかけて分析しても、その標準化回帰係数には大きな変化はみられなかった。

近年、**中高齢者のスポーツ**は「健康寿命の伸長」との関わりで、その振興の重要性が謳われている。また Society 5.0の展開から明らかなように、「地域福祉ネットワーク形成」や「ICTやAIによる福祉サービスの高質化」など、将来の社会において **福祉へのICT活用** に期待されるものは大きい。しかし、これらは両者ともまだ発達段階の分野でもあり、地域住民の幸福度に影響を与えていないのが現状である。

表6 Q1～3の幸福度を被説明変数に用いた重回帰分析の結果

## Q1 現在の幸福度を被説明変数に用いた重回帰分析

	標準化回帰係数 $\beta$	$t$	$p$ 値
こども達のスポーツ	.133	4.713	.0001
中高齢者のスポーツ	.048	1.596	.111
福祉コミュニティ形成	.140	4.776	.0001
福祉への ICT 活用	-.038	-1.395	.163
<i>adj R<sup>2</sup></i>	.063		

## Q2 地域の幸福度を被説明変数に用いた重回帰分析

	標準化回帰係数 $\beta$	$t$	$p$ 値
こども達のスポーツ	.202	7.352	.0001
中高齢者のスポーツ	-.007	-0.251	.802
福祉コミュニティ形成	.200	6.939	.0001
福祉への ICT 活用	-.048	-1.79	.074
<i>adj R<sup>2</sup></i>	.102		

## Q3 将来の幸福度を被説明変数に用いた重回帰分析

	標準化回帰係数 $\beta$	$t$	$p$ 値
こども達のスポーツ	.063	2.188	.029
中高齢者のスポーツ	.055	1.794	.073
福祉コミュニティ形成	.136	4.559	.0001
福祉への ICT 活用	-.082	-2.972	.003
<i>adj R<sup>2</sup></i>	.031		

## 4. 徳山大学の貢献度（ブランド化の達成度）評価（Q6）

地域での生活における**健幸（ウェルネス）の4要因**の現状を測る Q5 に対し、Q6 は、それらの4分野における徳山大学の貢献度（ブランド化の達成度）を、地域住民に直接的に問うものである。Q6 に対する回答を4要因それぞれについて平均した値を表7に示しておく。山口県内5地域と周南広域都市圏（周南市/下松市/光市）との間に、大きな差は認められず、いずれも中間回答（よくわからない）の3点以下の数字を示しており、地域の健幸（ウェルネス）向上に対する TU\_UBP の事業が、地域住民に浸透していない状況が示されたといえる。本調査は TU\_UBP が立ち上がって3年目（準備期間の初年度を除くと実質2

年目)の段階であった。今後の事業の継続が予定されており、本研究で提案した評価システムを用いて事業効果を可視化し、事業の PDCA 推進の基盤として活用していくことが課題となる。今回の調査で得た各種の数値は、そのベースラインとして重要な意味を持つものと考えられる。

表 7 健幸（ウェルネス）の 4 要因における徳山大学の貢献度（標準偏差）

	こども達のスポーツ	中高齢者のスポーツ	福祉コミュニティ形成	福祉への ICT 活用
周南市/ 下松市/光市	2.8 (0.8)	2.7 (0.7)	2.6 (0.7)	2.6 (0.7)
山口県内 5 地域平均	2.8 (0.7)	2.7 (0.7)	2.7 (0.7)	2.7 (0.7)

## VI. まとめ

本研究の目的は、徳山大学研究ブランディング事業 (TU\_UBP) がめざす地域の健幸（ウェルネス）向上のため、その現状に対する地域住民の評価とそれが幸福度や健康度にもたらす影響を測定することにあつた。この目的のため質問紙を準備し、山口県内の 5 地域（周南市/下松市/光市、岩国市/柳井市、山口市/防府市、宇部市/山陽小野田市/美祢市、下関市）を対象とする Web 調査を実施した。

幸福度と健康度に関しては、「第 1 回生活の質に関する調査結果」（内閣府経済社会総合研究所幸福度研究ユニット, 2012）を参考に、Q1「現在の幸福度」、Q2「あなたの街の人々の幸福度」、Q3「将来の幸福度」の 3 項目を使用した。Q4「健康状態」に関する項目としては、Q4.1「現在の健康度」、Q4.2「街に住む人々の健康度」の 2 項目とした。第 V 章 1 節に示したように、幸福度・健康度ともに周南広域都市圏の特徴はみられず、先行研究調査と比較しても同程度の幸福度が認められた。また、それらの相関分析から、幸福と健康との結びつきが示唆された。

健幸（ウェルネス）度の把握にあたっては、徳山大学研究ブランディング事業 (TU\_UBP) が掲げる **健幸（ウェルネス）の 4 要因**（こども達のスポーツ、中高齢者のスポーツ、福祉コミュニティ形成、福祉への ICT 活用）に関する地

域生活の現状、及び、それへの徳山大学の貢献度を問う質問項目（Q5及びQ6）を設定し、調査を実施した。その結果、第V章2節に示したように、この4要因に関して必ずしも十分な事業効果はあがっていないという現状が明らかになった。しかしこれは、TU\_UBPが立ち上がって3年目（準備期間の初年度を除くと実質2年目）という段階での結果である。今後の継続的な事業展開を通して、TU\_UBPの4要因と地域の幸福度の上昇が期待される。

幸福度を被説明変数とし、**健幸（ウェルネス）の4要因**を説明変数とする重回帰分析の結果において、**子ども達のスポーツ**と**福祉コミュニティ形成**が、一貫して有意な標準化回帰係数を示しており、地域の人々の幸福度にとって、これらの2点に関する環境整備が、重要な要因となっていることが示唆された。

一方、**中高齢者のスポーツ**及び**福祉分野へのICT活用**については、住民の幸福感との関連性がみられなかった。前者の**中高齢者のスポーツ**については、近年、「健康寿命の伸長」と関連してその振興の重要性が指摘されている。また「介護従事者不足」や「ネットワーク形成による福祉サービスの向上」などの課題解決において、後者の**福祉分野へのICT活用**の重要性も指摘されている。このような調査結果が得られた原因として、両者ともに、現在、まだ発展段階の先進的領域であり、地域住民の理解が浅いという可能性が考えられる。今後のTU\_UBPの展開においては、これら2要因の重要性に関する啓蒙活動にも力点を置いていく必要がある。

文部科学省によるTU\_UBPへの経済的支援は令和元（2019）年度をもって終了した。今後は、本学独自の努力で、その事業を継続し効果を上げていくことが求められている。その際、本論で考案した評価システムは、その事業効果を可視化しPDCAを推進していくうえでの基盤となるものと考えられる。また、今回の調査で得た各種の数値は、今後の事業成果を評価していくうえでのベースラインとして重要な意味を持つものとなるであろう。

## 【謝辞】

本研究は、徳山大学が受託した平成 29 (2017) 年度・文部科学省・私立大学研究ブランディング事業 『「健幸 (ウェルネス) 都市しゅうなん』構築に向けた研究・活動拠点の創設』の一環として、その経済的支援のもとで行われました。ここに謝意を表します。また、研究グループとして多くの教員諸氏が協働して当該事業に取り組むなか、本研究を進めるにあたっては、小松 佐穂子氏、赤松 礼奈氏、小林 武生氏から、大変示唆に富む有益な助言をいただいたこと、ここに深く感謝します。

## 【参考資料】

- ・内田由紀子(2016) 「地域の幸福の多面的測定と持続可能な多世代共創社会に向けての実践的フィードバック」, 戦術的創造研究推進事業(社会技術研究開発) 平成 28 年度研究開発実施報告書.
- ・筒井義郎 (2012) 「経済学、幸福の経済学と主観的幸福度」『心理学評論』 55 卷 1 号, 22-25.
- ・Diener, E. (2006) “Guidelines for national indicators of subjective well-being and ill-being”, *Journal of Happiness Studies: An Interdisciplinary Forum on Subjective Well-Being*, Springer.
- ・Diener, E., Oishi, S., & Lucas, R. E. (2015) “National accounts of subjective well-being”, *American psychologist*, 70(3), 234.
- ・Dolan, P., Peasgood, T., & White, M. (2008) “Do we really know what makes us happy? A review of the economic literature on the factors associated with subjective well-being”, *Journal of economic psychology*, 29(1), 94-122.
- ・Duckworth, A. L., Steen, T. A., & Seligman, M. E. (2005) “Positive psychology in clinical practice”, *Annu. Rev. Clin. Psychol.*, 1, 629-651.
- ・Neugarten, B. L., Havighurst, R. J., & Tobin, S. S. (1961) “The measurement of life satisfaction”, *Journal of gerontology*, 16, 134-143.
- ・内閣府経済社会総合研究所幸福度研究ユニット(2012) 「第 1 回 生活の質に関する調査結果」(インターネット調査)(検討用資料), <https://www5.cao.go.jp/keizai2/koufukudo/shiryou/7shiryou/3.pdf> (2020 年 2 月 2 日閲覧) .

【資料1】

質問項目

- Q1 現在、あなた自身はどの程度幸せですか。「とても幸せ」を10点、「とても不幸せ」を0点とすると、何点くらいになると思いますか。いずれかの数字を1つだけ選んでください。(0 とても不幸せ-10 とても幸せ)
- Q2 あなたからみて、あなたの街に住む人々は全般的にどのくらい「幸せ」を感じていると思いますか。「とても幸せ」を10点、「とても不幸せ」を0点とすると、何点くらいになると思いますか。いずれかの数字を1つだけ選んでください。(0 とても不幸せ-10 とても幸せ)
- Q3 あなたは今から5年後、現在に比べてどの程度幸せを感じていると思われませんか。現在と同じであれば0、今より幸せであると思われる場合はその程度に応じて+1～+5まで、今より不幸せになると思われる場合にはその程度に応じて-1～-5まで、当てはまるものを1つ選んでください。(-5 今より不幸せ-0 今と同じ-5 今より幸せ)
- Q4 以下についてあなたはどのように感じていますか。それぞれあてはまるものをお答えください。(1 健康でない-5 健康)
1. 現在のあなたの健康状態
  2. あなたからみた、あなたの街に住む人々の健康状態
- Q5 あなたの街での生活についてあてはまるものをそれぞれお答えください。以下の質問1～20は、「あなたの街には」または「あなたの街では」から始まるものとします。(1 全くそう思わない-5 強くそう思う)
1. こども達を対象とするスポーツイベントが沢山ある
  2. こども達がスポーツに参加しやすい環境が整っている
  3. こども達にスポーツを教える仕組み（指導者を含む）が充実している
  4. スポーツに親しむこどもが多い
  5. 生き生きとした健康的なこどもが多い
  6. 中高齢者を対象とする健康増進（維持）のためのスポーツイベントが沢山ある
  7. 中高齢者にとって健康増進（維持）のためのスポーツイベントに参加しやすい環境が整っている
  8. 中高齢者に健康増進（維持）のためのスポーツを教える仕組み（指導者を含む）が充実している

9. 健康増進（維持）のためのスポーツに親しむ中高齢者が多い
10. 介護や生活支援を必要としない中高齢者が多い
11. 福祉について質問や困ったことがあった場合、相談できる場所がある
12. 住民の間で日常的な交流が活発である
13. 地域で日常的な見守り活動がおこなわれている
14. 住民間のネットワーク作りが進んでいる
15. 住民が互いに助け合う習慣がある
16. 福祉・介護人材不足への対策として、情報技術（ICT）の活用が進められている
17. 福祉施設内や施設間において情報の共有化が進められている
18. 情報技術（ICT）活用について質問や困ったことがあった場合、相談できる場所がある
19. 介護ロボットや情報技術（ICT）を活用した新しい福祉サービスをよく見かける
20. 情報技術（ICT）の活用による「生活支援」と「介護サービス」の充実が望まれる

Q6 徳山大学について、あてはまるものをそれぞれお答えください。以下の質問 1～20 は、「徳山大学は」または「徳山大学では」から始まるものとします。（1 全くそう思わない～5 強くそう思う）

1. こども達を対象とするスポーツイベントを提供している
2. こども達のスポーツ参加促進に貢献している
3. こども達に正しいスポーツの仕方を指導してくれる
4. こども達をスポーツ好きにしてくれる
5. スポーツをとおしてこども達を健康にする一役を担っている
6. 中高齢者が参加できる健康増進（維持）のためのスポーツイベントを提供している
7. 中高齢者が健康増進（維持）のためのスポーツに参加しやすい環境の整備に貢献している
8. 中高齢者に対し、健康増進（維持）のための正しいスポーツの仕方を指導してくれる
9. 健康増進（維持）のためのスポーツに親しむ中高齢者数増加に貢献している
10. 健康増進（維持）のためのスポーツの促進をとおして、介護や生活支援を必要としない中高齢者の増加に貢献している
11. 福祉について質問や困ったことがあった場合、適切な相談相手になっている
12. 住民の間の日常的な交流促進に貢献している



13. 地域での日常的な見守り活動の知識提供に役立っている
14. 住民間のネットワーク作り促進に役立っている
15. 生活支援に関する実践方法を地域に提供している
16. 情報技術（ICT）を活用した福祉サービスの高質化をテーマとする教育研究が進んでいる
17. 福祉施設内や施設間において情報の共有化を進める一役を担っている
18. 情報技術（ICT）活用について質問や困ったことがあった場合、相談相手になっている
19. 介護ロボットや情報技術（ICT）を活用した新しい福祉サービスのアイデアを提供している
20. 情報技術（ICT）を活用した高質な「生活支援」と「介護サービス」を提供する街の実現に貢献している

【資料 2】

因子負荷行列

因子

	1	2	3	4
Q5_2	<b>0.898</b>	0.003	-0.027	-0.03
Q5_4	<b>0.802</b>	-0.043	-0.009	0.027
Q5_1	<b>0.77</b>	0.068	0.092	-0.083
Q5_3	<b>0.742</b>	0.077	0.068	-0.049
Q5_5	<b>0.704</b>	-0.09	-0.04	0.142
Q5_16	-0.019	<b>0.885</b>	-0.012	-0.009
Q5_18	-0.018	<b>0.843</b>	-0.009	0.022
Q5_19	-0.095	<b>0.769</b>	0.083	-0.051
Q5_17	0.048	<b>0.731</b>	0.022	0.074
Q5_20	0.109	<b>0.58</b>	-0.114	0.033
Q5_7	-0.009	-0.026	<b>0.907</b>	0.013
Q5_6	-0.029	0.035	<b>0.889</b>	-0.022
Q5_8	0.011	0.046	<b>0.863</b>	-0.037
Q5_9	0.069	-0.099	<b>0.747</b>	0.073
Q5_10	0.106	0.049	<b>0.321</b>	0.084
Q5_15	-0.026	-0.018	-0.054	<b>0.897</b>
Q5_12	-0.02	0	-0.03	<b>0.873</b>
Q5_14	-0.027	0.062	0.064	<b>0.759</b>
Q5_13	0.066	-0.017	0.087	<b>0.624</b>
Q5_11	0.113	0.116	0.095	<b>0.446</b>

(累積説明率 69.246)

因子相関行列

因子	1	2	3	4
1	1.000			
2	0.484	1.000		
3	0.640	0.573	1.000	
4	0.563	0.605	0.605	1.000

信頼性係数

因子	1	2	3	4
$\alpha$ 係数	.896	.872	.896	.878
$\omega$ 係数	.899	.877	.899	.883
因子得点	.915	.915	.915	.909